夏の海に行こう！

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の海に行こう！

【Ｎコード】

Ｎ２８８２Ｆ

【作者名】

壇　敬

【あらすじ】

この暑かった夏に、少年と少女がそれぞれの想いで海に行ったストーリーをオムニバスで綴ります。

Episode1

部活が終わった後、僕は教室に引き返してきた。
引き返した訳は、缶ペンがなかったのだ。確か、カバンに入れたと思ったのだが、それが見当たらなかったのだ。そのまま帰ってしまっても指したる問題はないように思ったが、いつもあるものが無いのは気になって仕方がない。
西日の差した教室にドタバタと入ると、ひとつのシルエットがビクつくようにこちらに向きを変えた。強い西日を背景にしていたそのシルエットは、こちらに近づいてきた。そして、聞こえるか聞こえないかくらいの声がした。
「友則」
その声とシルエットのカタチで、その人物を特定することが出来た。
「なんだ、響子か」
僕はホッとした声でそう呟いてから、響子に聞いてみた。
「あのさ、僕の缶ペン、知らないかな？　かばんの中に見当たらないんだ」
そう言いながら、自分の机やロッカーを探り回ったが、見当たらなかった。
「あれー、おかしいなぁー」
机の中を覗き込んでいた僕は、ふいにヒトの気配を感じた。顔を上げると、響子がすぐ横に立っていた。僕は驚いて急に頭を持ち上げた弾みで、机の下に突っ込んでいた頭を机の天板にゴンとぶつけた。
響子はおもむろに右手を差し出した。その手には僕の缶ペンが握られていた。
「これ、でしょ？」
セミロングの髪で顔が隠れていて、響子の表情は読み取れなかっ

た。
「あ、これだ、これ。ありがとう。何処にあった？」
どうして響子が僕の缶ペンを持っているのか、僕は一瞬、不可解に思った。だが、その疑問より缶ペンが見付かったことの方に、僕の気持ちのウエイトがあった。
僕は立ち上がって、缶ペンを受け取ろうとした。すると響子は、左手で僕の右手の手首を掴んだ。
「友則…」
響子はか細い、そして少し震えた声だった。それは、いつもの声とは全然違っていた。

「おい、友則！」
響子の大きな声が教室に響いた。クラスの奴らは（また始まった）と、知らんフリを決め込んでいた。
「響子、お前なー！」
いつも些細なことなのだ、口ケンカの理由なんて。どちらかがちょっと我慢すればいいのだが、ついつい、ヒートアップしてしまう。
ひとしきり言い合いが終わると、お互いの決めゼリフを言って終わるのだ。
「もう、ちゃんとしてよねっ」
「そっちこそ、頼むぜっ」
それも、隣同士の席なのだ。クラスの奴らは、男子も女子も呆れていた。
「仲がいいのにも程があるよなー」
「ホント、そうよねー」
いつも、そんな囁きがクラスを満たすのだった。

だから、僕は元気のいい響子の声しか知らなかった。そんな、か細くて優しい声を聞いたことが無かった。それに、僕の右手を握っている響子の、小さくて優しくて柔らかい左手を知らなかった。

僕はなぜか急に、心臓の拍動が激しくなった。そして、僕は生唾を飲み込んだ。
「友則、デート、して」
僕は、響子の言葉に呆気に取られていた。
響子は完全にうつむいていた。
「え？　なに？」
しどろもどろで受け応えする僕に、響子は更にか細い、更に優しい声で言った。
「一緒に海に行こ。…日曜日の１０時に、駅で待ってる」
僕は気が動転したままだった。
だが響子は、僕の右手に缶ペンを渡すと、握っていた左手を放して、教室を出て行った。

駅で待っていると、１０時をちょっと過ぎた頃、１人の女の子が僕に声を掛けてきた。
「待った？」
その声はまさしく響子だったが、容姿はずい分違っていた。
オフホワイトのタンクトップに、ネイビーのパイルパーカーのアンサンブル。レトロチェックのミニスカートにサンダル。それが響子の姿だった。
僕はちょっとドキッとした。
「なんか、可愛いな」
そう言った僕に、響子は照れて笑った。響子の笑った顔は初めて見た気がした。
僕の格好といえば、白のＴシャツにジーパン。
「僕の格好、おかしくないか？」
響子は、はにかんで言った。
「ううん、そんなことないわ。さ、行こ」
響子は、僕の腕を取って駅の改札に向った。

海に着いた僕と響子は水着に着替えた。
響子は、ブラウン×オフホワイトのバイカラーのビキニで、ショーツがブラウン、ブラがオフホワイト、大きなリボンが付いた可愛い水着だった。
僕はメディテーショングリーンのボードショーツ。
僕と響子は、白い砂のビーチで座っていた。
何の会話も無く、青い海と青い空を眺めていた。
僕はようやく言葉を搾り出した。
「何か変な感じだよ」
僕がそう言うと響子は僕の顔を覗き込んで言った。
「え？　どうして？」
僕は、ちょっとどもりながら遠くを見た。
「だって、いつもケンカしてるのにさ。今、2人で海に来てるから」
僕がそう言うと、響子はフフフと笑った。
「いいじゃない。どっちにしろ『仲のいい2人』なんだから」
そう言って響子は僕の腕にしな垂れてきた。僕も響子の肩を抱いた。
響子は思い付いたように言った。
「ね、泳ご」
僕もそれに頷いた。
「うん、泳ごう」
僕と響子は立ち上がって砂を払い、手をつないで、波打ち際に駆けていった。

白い渚

白い砂浜に、たくさんの花が咲いている。色とりどりのビーチパラソルの花が。その花と花の間を縫うようにして、カラフルな水着をまとった男女が行き交う。女同士、男同士、そしてカップル。

僕は彼女と、その白い砂浜にいた。彼女の水着は、薄いピンクで大きな花柄のタンキニで、ペールカーキのショートパンツを履いていた。僕の水着はネイビーブルーのトランクスタイプ、それにパッションオレンジのタンクトップを着た。

僕はパラソルの下に寝そべり、彼女はパラソルの下で体育座りだった。暑い浜の熱風が、彼女の長めのボブを揺らしていた。

「ねぇ、泳がない？」

「あぁ、泳ごうか」

海水の表層は暑かったが、下層はひんやりして気持ちが良かった。手をつなぎながら泳いで、少し浜から離れた。

何かの拍子に高い波が寄せてきた。彼女は不意を付かれて、頭から水を被った。

「キャッ！」

彼女はそれにビックリして慌てて、僕にしがみついてきた。

「あー、ビックリしたわ」

彼女は僕の腕を抱え込み、身体をピタリと寄せてきた。

「おいおい、溺れそうだよ」

僕がそう言うと、彼女は身体が密着していることに気付いて、慌てて、しかし恥ずかしそうに離れた。

僕がニヤニヤしながら、

「気持ち良かったよ」

と言うと、彼女は僕の肩を思いっ切り叩いて、

「バカッ！」

と言って浜に向って泳ぎ始めた。僕もその後に続いた。

海から上がった彼女は、髪がぬれて水着が張り付き、とてもセクシーだった。
僕は思わず彼女に駆け寄り、彼女の耳元で、
「好きだよ」
とつぶやいた。
彼女はハッとして顔を上げ、日焼けで赤くなった頬を更に赤くして、こう言った。
「ん、もう！」
その、彼女の口元にはどことなく笑みが浮かんでいた。

白い砂浜に、白い砂。
青い海に、青い空。
クールな色の世界なのに、暑い思い出がたくさん生まれる。
それが「夏」である。白い渚がその舞台なのだ。

Passing summer 1

気が付くと夏が過ぎてゆく。
暑さだけを経験して過ぎてゆく。
夏の思い出など何もない。

…そうでもないか。
彼女ではないけれど、女の子とは遊びに行ったな。
佐登子はクラスメイト。いつも一緒に騒いでいる女の子だ。
夏休みに入ってすぐに、携帯に電話があった。
「和人、明日は空いてる？」
「唐突に何さ？」
「ん、うん。あのね、海に行かないかなって」
「へぇ、誰と行くんだ？」
「えっとね、みんなで海に行こうって。そんな話なの」
「あぁ、いいけどさ」
「じゃ、明日9時に駅で…」
「待ち合わせか？」
「え、あ、うん、そう」
「分かった」

次の日の朝、9時に15分遅れて駅に着いた。それらしい集団が見当たらなかった。周りを見渡すと、改札の横に佐登子が1人立っていた。
「うーっす」
僕が声を掛けると、佐登子が恥ずかしそうに挨拶した。
「お、おはよ」
僕は周りを見渡しながら言った。
「他の連中は？」

佐登子は下を向いたまま、モジモジしていた。そして、小さな声でこう言った。
「他のみんなは、えっとね、来ないの」
僕は、何となく悟った。
「ふーん、解かったよ。佐登子と2人っきりな訳だ」
僕は少し意地悪になった。
佐登子は、更にモジモジするだけだった。
「佐登子、いいよ。海、行こうよ」
僕はそう言って、佐登子の右手をつないだ。佐登子は一瞬ビクッとしたが、振り解くことはしなった。そして、顔を上げて僕を見て頷いた。

Passing summer 2

海へ向う電車は少し混んでいた。
つり革につかまって、二人とも外を見ていた。でも、手はつないだままだった。
「佐登子」
「なに、和人？」
「どうして誘ったんだ？」
「どうしてって…、何となく」
「何となく、何さ？」
「和人と、海に行きたいなって」
「ふ～ん」
「おかしい？」
「そうでもないけど」
小さくて、可愛いって感じの女の子。いつも控えめだけど、ここって時に存在感がある娘だ。それが佐登子だ。
髪型は、あごラインの前下がりで、レイヤーは入っていないショートボブ。オフホワイトのチビ袖シンプルTシャツにブルーチェックのワンピース、ベージュのサンダルを履いた佐登子。
学校で制服姿しか知らないから、ちょっと新鮮な感じだ。…ちょっといいかも。

浜辺に着いて、海の家で着替えをした。
佐登子は、胸元フリルが付いた黒で、ホルターネックのセパレートビキニで、フリルの付いた黒のミニスカートを穿いていた。
僕は、ちょっとドキッとした。
「似合ってるよ」
僕がそう言うと、佐登子は照れ臭そうに言った。
「そお？　ありがと」

砂浜に荷物を置いて、海の家で借りたビーチパラソルを立てた。
「さぁてと。泳ぐか？」
「うん」
熱い砂の上をピョンピョンと飛んで、波打ち際まで来た。
「ちょっと冷たいね」
「大丈夫だよ、海の中に入っちまえば」
そう言って僕は、佐登子の手を引いて海の中に入っていった。
まだ背が立つ程の深さだが、佐登子は僕の手を握って離さない。
「大丈夫だよ、佐登子」
「だって、私、泳げないんだもん」
佐登子の肩の深さまできた時、波が高くて佐登子の顔に掛かった。
「キャッ！」
僕にしがみついてきた。ちょっと嬉しい、やっぱり。でも、ちょっと可哀想な感じだった。
「浜へ戻ろうか」
「ううん、大丈夫」
「ホントかぁ？」
「和人がいるから、大丈夫」
「僕は意地悪だぞ」
「和人はそんなヒトじゃないもん」
会話している間、佐登子はずーっと、僕の腕にしがみついたままだった。
しばらくそのままでいたが、もう少し浅いところへ移動した。
佐登子の胸の辺りの浅さ、ビキニのトップが見えるくらいのところで、佐登子はしがみついていた手を離した。
ざぶざぶと泳いで、海の水を掛け合って、身体が冷えたので海から上がった。
ビーチパラソルの下で、身体を拭いた。ぬれていた身体がすぐに乾いた。
「和人、今日はごめんね」

「何が？」
「だって…。みんな来るって騙したから」
「あ、あぁ、そのことか」
僕はペットボトルのコーラを一口すすった。佐登子もペットボトルを口に当てた。
「やっぱり、そーゆーことだったんだ」
「ごめん」
「何でそんなことしたのさ？」
佐登子はペットボトルの水をあおった。
「だって、取られそうだったんだもん。それに、一番がいいから…」
そう言って佐登子は下を向いてしまった。
僕はチラリと佐登子を見てから、水平線を見つめた。
「ふ～ん」
そう言って僕はコーラを飲み干した。
その様子を佐登子はチラッと見てから呟いた。
「もう！　ったくぅ！　鈍感なんだからっ！」
空っぽのペットボトルを見つめていた僕の耳に、佐登子の言葉はシッカリと届いていたが、聞こえてないフリをしてこう言った。
「佐登子、今、何か言った？」
佐登子はプッと脹れて、こちらをジッと睨んだ。そして、プイと横を向いてしまった。
ジリジリと太陽が砂を焼いていた。

Passing summer 3

海の家で借りたビーチマットに佐登子を乗せて、少し沖の方まで泳いだ。
お昼近くになって、ますます太陽が厳しく照り始めた。
海面近くの反射はキツイ。
ましてや、ビーチマットの上に寝そべっている佐登子は、ジリジリと焼けているだろう。
「佐登子、暑くないか？」
「ううん、そんなこと無いよ」
「ジリジリしてないか？」
「大丈夫だって。時々、海の水を掛けてるから」
「ふ～ん」
僕は頭が熱くなってきて、大粒の汗が流れた。
「和人、水掛けてあげる」
そう言って、佐登子は手ですくった海の水を僕の頭に掛けた。
「お、いいね。気持ちいいけど、しょっぱいよ」
佐登子は目を細めて「うふふ」と笑った。
「もう、疲れたよ」
「なんで？」
「ずーっとビーチマット、引っ張ってるからだよ」
「あ、そっか」
「あ～、腹減ったよ～」
「じゃあ、岸へ戻りましょ」
海から上がった僕と佐登子は、ビーチパラソルのところに戻った。
佐登子は、少し大きめのデニムのトートバッグから、茶巾袋を２つ取り出した。
「お弁当、作って来たんだけど」
「お、佐登子の手作りか！」

「おにぎりはね。オカズはお母さんに手伝ってもらった」
「いいねぇ、いいじゃん」
僕は、佐登子から茶巾袋を１つ受け取った。
「じゃ、いっただきま～す」
紐を解いて開けると、小さめのおにぎりが４つ、中身は、シャケとタラコ、昆布に梅干。
その下のタッパーには、唐揚げと玉子焼き、ウインナー、それにブロッコリーとプチトマトが入っていた。
「うちのお袋より旨いよ」
「え、そう？　…よかったぁ」
佐登子は嬉しそうだった。
僕があっという間に食べてしまったので、更に佐登子はビックリしていた。その様子を見て、佐登子が僕に訊いてきた。
「おにぎり、食べる？」
「サンキュー。もうちょっと食べたかったんだ」
僕はほぼ満腹だったが、佐登子の弁当が嬉しくて、もう少し食べたい気がしたのだ。

お弁当を食べた後、少し話をした。
「デートしてるって感じだな」
「…」
佐登子は、僕の言葉に今更ながら赤くなった。
「楽しいけど…」
その言葉に、佐登子は僕の顔を覗き込んだ。
「ちょっとドキドキ感がないなー」
佐登子はすぐに下を向いて、小さな声で呟いた。
「あたしはドキドキなのに…」
その呟きを受けて、僕はこう言った。
「ドギマギはしてるけどな」
それを聞いて佐登子はニヤッとして、軽いガッツポーズをした。

一日のうちで一番気温の上がる午後2時。
僕と佐登子はビーチパラソルをたたみ、海の家でシャワーを浴びて、水着を着替えた。
佐登子の髪がぬれていて、ちょっと艶っぽかった。　それにずい分日焼けしたようで、Tシャツから出た腕、Tシャツから僅かに見える襟足と肩と背中、そして頬が真っ赤になっている。
「大丈夫かぁ？　ずい分日焼けしてるぜ」
「あたし、いつもこうなるのよ」
「僕は、ヒリヒリしてるけどぉ」
「オイルも何も塗ってなかったじゃない！　それじゃダメよぉ」
「Tシャツが痛いよぉ」
佐登子は、ケラケラと笑った。
僕は、マジでヒリヒリしていた。

帰りの電車の中で、好きな音楽の話を少しだけした。
そのうちに、佐登子は居眠りをし始めたのだ。たぶん、朝早く起きて弁当を作ったのだろうな。
佐登子は僕の肩に寄り掛かって、軽い寝息を立てた。佐登子の髪の毛の、いい匂いが僕の鼻をくすぐった。
「可愛い、かもな」
僕は、ボソリと呟いた。
そして1人で照れていた。

駅のコンコースで、佐登子と別れた。
「今日はありがと」
「どういたしまして」
「とっても楽しかったわ」
「弁当、美味かったぜ」
佐登子は、名残惜しそうだった。

僕は、そんな佐登子にちょっと意地悪にこう言った。
「じゃ、さよなら」
佐登子は大きく頷いた。
「う、うん。バイバイ」
そう言って手を振った。
僕は手を振ってからすぐに振り向いて歩き出した。

あれから夏休みの間に佐登子からの連絡は無かった。
学校が始まって、佐登子はよそよそしかった。噂によると、隣のクラスのイケメン野郎と夏休みの後半から付き合い始めたそうだ。
…う～ん、ちょっともったいないコト、したかな？
ま、いっか。

Episode2

クラスのみんなは全然知らなかった。
あのFカップで美人の由貴子とガリ勉で天才の宗太が付き合っているなんて、誰が想像できるだろう！
『昨日、映画館から出てきたのを見たんだって』
『先週の日曜日、図書館で2人、勉強してたぜ』
そんな2人の噂はいつのまにか尾ひれが付いて、キスしたという話まで飛び交っていた。
クラスの噂をよそに、学校での2人は今まで通りで何も変わっていなかった。
それだけに信憑性があるような、ないような。

だが、女の子同志は隠せないようだ。由貴子と仲がいい女子が訊いたそうだ。
以下は、その伝聞である。
「由貴子、聞きたいことがあるんだけど」
「なに？」
「宗太クンと映画へ行ったってホントなの？」
「あれぇ？　何で知ってんの？」
「映画館から出てきたのを見たって人がいるのよ」
「あら、見られちゃったんだ」
「じゃ、宗太クンと付き合ってるの？」
「んー、付き合ってるって訳じゃないけど」
「じゃあ、何なのよ？」
「お友達って感じだけど」
結局、要領を得ない話だった。だが、映画に行った事だけは確かなようだ。

宗太と同じ塾へ通う、イケメン秀才の英一が宗太に訊いてみたそうだ。
以下は、その伝聞である。
「おい、宗太。女の子と上手くやってるそうだな」
「何のことだ？」
「お前もじれったい奴だな。由貴子のことだよ！」
「由貴子って、クラスの女子のか？」
「あぁ、そうだよ。付き合ってんのかよ？」
「付き合ってはいない」
「付き合ってないだと！　だったら何なんだよ？」
「勉強を教えている」
「勉強を教えているぅ？　そんなこと、信じられっか！」
「事実は事実だ」
「映画に行ったって聞いたぞ」
「それは僕がいろいろと教わっているのだ」
「教わるぅ？　由貴子から何を教わってるんだ？」
「いろいろだ」
「お前『いろいろ』でごまかすなよ」
「勉強以外のその他全般だ」
「ほーぅ、それは『恋愛も』ってことか？」
「以後は黙秘権を行使する」
「ちっ！」
宗太は、さすがに天才である。含みを持たせながら、交わされてしまったようだ。
全く、当てにならない、女癖の悪い英一の奴め！

そのうちに、学校でも2人が会話している姿が次第に見掛けられるようになった。
そして決定的になったのが、放課後のことだ。
二人で帰るのをみんなが目撃した日から、ずーっと一緒に帰るよ

うになったのだ。
２人の行動があからさまになるに連れ、２人の様子も変わってきた。
由貴子は、今まで『ケバイ』印象だったが、髪を黒くしてストレートにし、服装にもどことなく派手さが無くなった。清楚で誠実な服装と髪形になった。
宗太も、メガネが変わっていた。型の古い黒ブチのメガネだったのが、エメラルドブルーのフォックスタイプフレームで精悍な感じなっていた。髪型もひどいボサボサ頭から、カラーリングしたナチュラルアシメになっていた。
クラスの女子は、宗太の変貌振りに驚き、そして一部の女子や下級生にファンが出来た。イケメン英一の面子は丸潰れだ。

こうして付き合っていることが事実上認識されると、次の問題は成績だ。だが、この２人に関してはノープロブレムだった。
由貴子の成績はハッキリ言って、後から数えた方が早かったくらいだ。だが、それが宗太と付き合うようになって、徐々に上がってきて１００位以内に顔を出すようになった。宗太が教え上手だったのか、それとも恋ゆえなのか、推し量るのは難しいことだった。
もちろん、宗太は相変わらずの天才だ。奴はいつでも１番を死守している。

僕の彼女、悦子は由貴子と仲がいい。その由貴子からお願いがあったという。
「ダブルデートしたいんだって」
「一緒に海に行かないかって」
僕も宗太と仲が悪い訳じゃない。僕も悦子も、この２人のデートに興味があった。
「僕はいいけど、悦子は？」
すると、悦子は僕にこう言った。

「そう言うと思ったわ。あたしも、あの2人が気になってんの。絶対、面白いわよね」
悦子も呆れたものである。
ま、僕も興味がない訳ではないが。

当日、駅で待ち合わせした4人は、電車に乗り込んで海浜公園ビーチに向った。
白い砂浜で見た彼ら2人は、とても素晴らしい恋人同士だった。
宗太は若干細かったが、シッカリとした体格で由貴子をエスコートしていた。由貴子のボディは確かにキュートだったが、華奢な女の子って感じだった。
2人は寄り添って楽しそうに会話をし、僕らにも気を使って話しかけてくれた。
宗太と由貴子を見ていて、清々しささえ感じた。
僕は誤解していた。
彼らは、普通の恋愛を普通にしているだけだ。
そう思ったら、僕は嬉しくなった。
「宗太！　ビーチボールで勝負だ！」
「僕と悦子、宗太と由貴子のチーム戦だ」
僕は、そう宗太に声を掛けた。
宗太は、ニッコリと笑って言った。
「そうだな。負けないよな、由貴子」
由貴子は、宗太と顔を見合わせてから頷いた。
悦子も負けてなかった。
「あたし達だって負けないわよ～」
僕は悦子の手を、宗太は由貴子の手を、それぞれに取って波打ち際に走っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2882f/

夏の海に行こう！

2010年10月8日15時19分発行